

生活環境の欧米化に伴って日本でも各種疾患の分布が少しずつ変わってきている。reflux esophagitis もその1つであろう。従来、術後例を除けば該疾患は sliding type の hiatal hernia に強く関連づけられた 胃内容逆流に 起因すると 考えられてきたが、今日、LES 圧の減弱による 逆流の頻度と排出の遅延が病因であろうとされている。

一方、逆流があれば 食道炎が必ず 起こるかと言えそうでもない。消化性潰瘍の病因・治療が専ら分析の比較的容易な酸・ペプシンなど攻撃因子に向けられてきたが、方法論の開発に伴い防御因子側の検討が今日注目を浴びつつある。食道炎においても将来粘膜側の防御力が問題にされる時代がくるかもしれない。

一方、臨床面からみると LES 圧や食道下端 pH の持続測定は必ずしも容易ではなく、内視鏡所見と臨床症状によって診断が行われればよいではないかという意見も出てくる。いずれにしても上部消化管のスクリーニングや精密検査が panendoscope によって行われてきている今日、食道炎の存在はますます増加してゆくものと思われるが、やはり欧米のそれと多少趣を異にし重篤なものは少ない。今後の展開を期待したい。

<大柴 三郎>